

令和7年6月22日

令和7年度 東海高校総体を終えて

陸上競技部

大会初日。渡邊志帆の女子400m予選から競技が始まる。予選を通過し、準決で出した自己ベスト57.50は豊川高校記録として名を残した。男子400mの山科樹輝も惜しくも決勝進出を逃すも、長らく怪我で苦しんできたが、復調の兆しを見せ、最終日のマイルに賭ける。

三好澄果の女子100mH。予選を自己ベストに近い記録で無難に通過すると、準決、決勝と自己ベストを更新。圧倒的な強さで優勝を果たした。決勝の13秒63は全国ランキング5位に位置する。「まだまだ伸びる」。インターハイの頂を臨む。

東海6位でインターハイとなるが、女子棒高跳だけは4位まで。その狭き門を通過したのは宮内ゆら。3m20の3回目。絶体絶命の極限状態で最高のパフォーマンスで見事クリア。その後も自己ベストタイ記録3m30を跳び3位入賞。悲願の同種目初のインターハイ出場権を得た。

大会2日目。男子棒高跳に出場した藤木徠喜。自己ベストタイ記録を跳ぶも入賞ならず。貴重な経験を来年に活かす。

男子400mHに出場した主将、小川倖周。自己ベストで決勝を走り切るも、惜しくも7位。明日のマイルにすべてを賭ける。巻口周平が出場した男子100m。異様なレベルとなった男子100mで決勝まで進出するも7位。100m3本の後、気持ちを切り替えて3本目の4×100mRのアンカーを走る。

女子4×100mRは東三、県、そしてこの東海を4人の3年生、弓木野杏純、酒井花菜、渡邊志帆、三好澄果で戦い抜く。誰か一人が欠けると決して手が届かない悲願の全国。準決では県から1秒近くもベストを更新し、決勝へ。直前の円陣で4人の心は一つになる。決勝5位で創部初の女子リレーでのインターハイ出場。この4人が陸上競技部の女子の歴史を塗り替えた。

東海優勝を目指す男子4×100mR。県を勝ち抜いたメンバー、鈴木大和、内藤翔真、木林悠翔、巻口周平で予選を通過。ここで秘密兵器、向井ビニシウスを投入。大会記録に迫る40秒38準決最高記録で決勝へ。優勝は逃したものの、2位で昨年に続きインターハイ出場を決めた。

大会最終日。男子200mに木林悠翔が出場。過去最高レベルの東海地区の短距離種目。この舞台に立てなかった内藤、鈴木の鉢巻きを両腕に巻いて、その無念をも引き受けてスタートラインに立つ。掲示板に速報が出た瞬間、大きな歓声が上がる。100分の1秒差で6位入賞。

男子4×400mR予選。持ち記録では決勝進出は難しい。監督の伊藤先生が動く。予選のアップを中断させて、走順の入れ替えを伝える。前日までの個人種目の結果、調整の様子、全てを総合的に判断した英断であった。水元空、山科樹輝、高垣圭汰、小川倖周が思い描いた戦略通りの走りを見せ、組2着で決勝進出。ここで、主将の小川は全ての力を使い切り、決勝は内藤へ「あとは任せた」と涙とともに思いを託した。

大会最終種目となる4×400mR決勝。8チーム中6チームがインターハイ。レース直前、送り出す招集所前に自然と和ができる。「絶対勝つぞ」決勝を離脱した主将の小川は、円陣の中心でチームを鼓舞する。全員の魂はレースに臨む。振り返れば、この瞬間に勝利が確定したのかもしれない。大歓声の中、アンカーの山科が6位でフィニッシュ。伊藤監督は涙でくしゃくしゃになった笑顔で、保護者の大応援団にお礼を述べた。

令和7年度のインターハイは戦後80年を迎える広島で行われる。陸上競技部としては5種目21名、史上最多出場となる。創立100周年に向けて、新たな歴史を刻む。